



## 忠義の一族 問註所氏

●問合せ 生涯学習課文化財保護係 ☎75-3343

突然ですが皆さん、今年の大河ドラマはご覧になっていますか？今年「鎌倉殿の13人」と題し、鎌倉幕府を興した初代将軍源頼朝をはじめとした将軍家と、主人公・北条義時を筆頭とした御家人達に焦点を当てた物語が描かれています。鎌倉幕府はそれまでの公家政権から武家政権へと転換する画期となりました。ドラマでも描かれている通り、坂東武士を中心に語られることが多く、うきは市からは遠く離れた関係のない物語のようにも思えます。しかし、実はこのストーリーの登場人物とうきは市の歴史上のとある一族は密接な繋がりがあるのです。今回はその一族についてのお話です。

「鎌倉殿の13人」に登場する、まさに13人のうちの1人に、三善康信みよしやすのぶという人物がいます。三善康信は鎌倉幕府の役所の1つ「問註所もんちゅうじょ」の初代執事となります。問註所とは現在の裁判所のような機関です。うきは市に住んでいると、「問註所氏」という氏族の名を聞いたことがあるかもしれません。実はこの問註所氏こそ、源頼朝と共に幕府を興し、その後長く活躍した三善康信の子孫なのです。康信は頼朝から、当時の筑後国生葉郡新川・田籠など15ヶ村300町歩を建久7年（1196）に賜りました。そしてその末裔三善康行みよしやすゆきが正和2年（1313）生葉郡主として下向して、「問註所康行」を名乗りました。これがうきは問註所氏の始まりです。康行は生葉に下向した後、浮羽町新川の長岩城に居城したとされます。ちなみに問註所氏の活動については、『問註所文書』という古文書が残されており、福岡県の重要文化財に指定されています。それでは次に、康行下向以降、南北朝期・室町期・戦国期の3時期について、問註所氏の動向を概観しましょう。

まず、南北朝期、九州の北朝方の主な勢力は九州探題に任命された一色範氏いっしきのりうじと、九州三人衆といわれた少弐氏、大友氏、島津氏の三氏ですが、問註所氏は終始大友方として活躍します。建武3年（1336）3月の多々良川の激戦で武功をたて、康行は竹野郷を与えられています。

次に室町期です。寛正6年（1465）大友親繁

が筑後守護職に任じられると、反対した黒木・三池ら筑後国衆らが肥後の小代兵庫助しょうだいひょうごのすけと結んで兵を挙げました。この乱は親繁に鎮圧されますが、問註所教康は太友方として出陣し、『問註所家譜』によると、長祿3年（1459）に32歳で戦死したことが分かっています。この争乱から2年後には応仁の乱が勃発しますが、戦国時代へと突入する時代の流れの中で、問註所氏ら筑後の諸将も戦乱に明け暮れていくこととなります。

戦国期の筑後地域は筑後15城主とも呼ばれる15家が割拠し、問註所氏もその内の一家でした。問註所親照ちかてるの代になると、浮羽町の小坂村に井上城を、さらにその詰め城として立石城を築き、宿敵星野氏・秋月氏らへの備えを固めました。度重なる戦の中で武功を挙げた問註所氏は大友氏から感状を受けたり、親照の嫡男鑑豊あきとよが元服したとき、大友家は一字を与えるとともに馬・太刀などを贈る厚遇を見せました。

以上、戦国期までの問註所氏について見てきましたが、問註所氏は一貫して大友氏に忠義を尽くしていたことが分かります。大友氏が天正6年（1578）の耳川の戦いで島津氏に大敗し勢力が衰えはじめても、問註所氏は最後まで大友方として戦い抜きました。秀吉の朝鮮出兵後、大友氏の改易に伴い問註所氏も所領を失いますが、最終的には立花宗茂に召し抱えられ、柳川藩士となりました。

ドラマの中の三善康信にはこんなセリフがありました。「諍いさかいの仲裁は得意中の得意。精いっぱい努めます」うきは問註所氏は、こんな実直で真面目な康信の想いを受け継いでいたのかもしれない。



問註所文書